

「主の前で誠実であれ」

ヨシュア 7：2～12 (抜粋)

ヨシュアは部下をエリコからベテルの東、ベテ・アベンの近くにあるアイに遣わし、彼らに言った。「上って行って、あの地を偵察せよ。」・・・彼らはヨシュアのもとに帰って来て言った。「民をみな上って行かせるには及びません。二、三千人ぐらいを上らせて、アイを討たせるよいでしょう。・・・」そこで、民のうち、およそ三千人がそこに上ったが、彼らはアイの人々の前から逃げた。・・・ヨシュアは衣を引き裂き、イスラエルの長老たちとともに、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、自分たちの頭にちりをかぶった。ヨシュアは言った。「ああ、神、主よ。あなたはどのようにしてこの民にヨルダン川をあえて渡らせ、私たちをエモリ人の手に渡して滅ぼそうとされるのですか。・・・」

主はヨシュアに告げられた。「立て。・・・イスラエルは罪ある者となった。彼らは、わたしが命じたわたしの契約を破った。聖絶の物の一部を取り、盗み、欺いて、それを自分のものの中に入れることまでした。・・・」

アイでの敗北の原因

神は、不思議な方法でエリコの町を滅ぼされました。イスラエルの民は、次ぎにエリコより小さな町アイを攻撃しましたが、破れ敗走しました。神は、その理由をヨシュアに告げられます。「イスラエルは罪ある者となった。彼らは、わたしが命じたわたしの契約を破った。聖絶の物の一部を取り、盗み、欺いて、それを自分のものの中に入れることまでした。」(11節)と。聖絶すべき物を盗んだために、自らが滅ぼし尽くされる聖絶すべきものとなったと語られたのです。

旧約にみる裁き

古代社会における戦いでは、勝利した者が品物をぶんどり物とし、人は奴隷とするのが不通でした。しかし、神はすべてのものを滅ぼし尽くすようにと命じられました。何一つ手を付けてはならないと命じられたのです。愛の神が何故この様なことを命じられるのでしょうか。

旧約聖書には、神自らがすべてのものを滅ぼされた記録があります。ノアの洪水(創世6～9章)とソドムとゴモラの滅亡(創世18～19章)です。それぞれ大洪水と硫黄によってことごとく滅ぼし尽くされました。ノアの時代については、「人の悪が増大し、その心に量ることがみな、いつも悪に傾くのをごらんになった。」(創世6章5節)、ソドムとゴモラについては「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い」(創世18章20節)と記され、人の罪が滅ぼし尽くされる原因となっています。共通することは、神が自ら滅ぼされた点です。

聖絶せよ

「聖絶」との訳語は、新改訳聖書の造語です。辞書にはありません。その意味を十分理解することは出来ませんが、神がなさろうとする裁きをイスラエルの民を用いて行われたと言えます。ですから、神は「イスラエルは罪ある者となった。彼らは、わたしが命じたわたしの契約を破った。聖絶の物の一部を取り、盗み、欺いて、それを自分のものの中に入れることまでした。」(11節)とかたり、聖絶するはずの者が聖絶されるべき者となったと宣言されたのです。事実、アカンは自分の天幕の下にエリコから盗んだ物を隠していました(20～21節)。その結果、エリコと同じように自らが滅ぼし尽くされてしまいました(25～26節)。

主の前で誠実であれ

神は、ヨシュアに「わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法のすべてを守り行うためである。これを離れて、右にも左にもそれではならない。・・・このみおしえの書をあなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさめ。そのうちに記されているすべてを守り行なうためである。」(1章7～8節)と語られました。それは、ヨシュアだけではなく、すべてのキリスト者にも語りかけられているのです。主の前で誠実に歩むことが求められているのです。パウロは、コリントの教会にいた「何をしても神から許されている」と主張する人々に対して『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが益にあるわけではありません。『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。」(コリント第一10章23節)と書き送りました。私たちが益になり人を育てることを求めましょう。